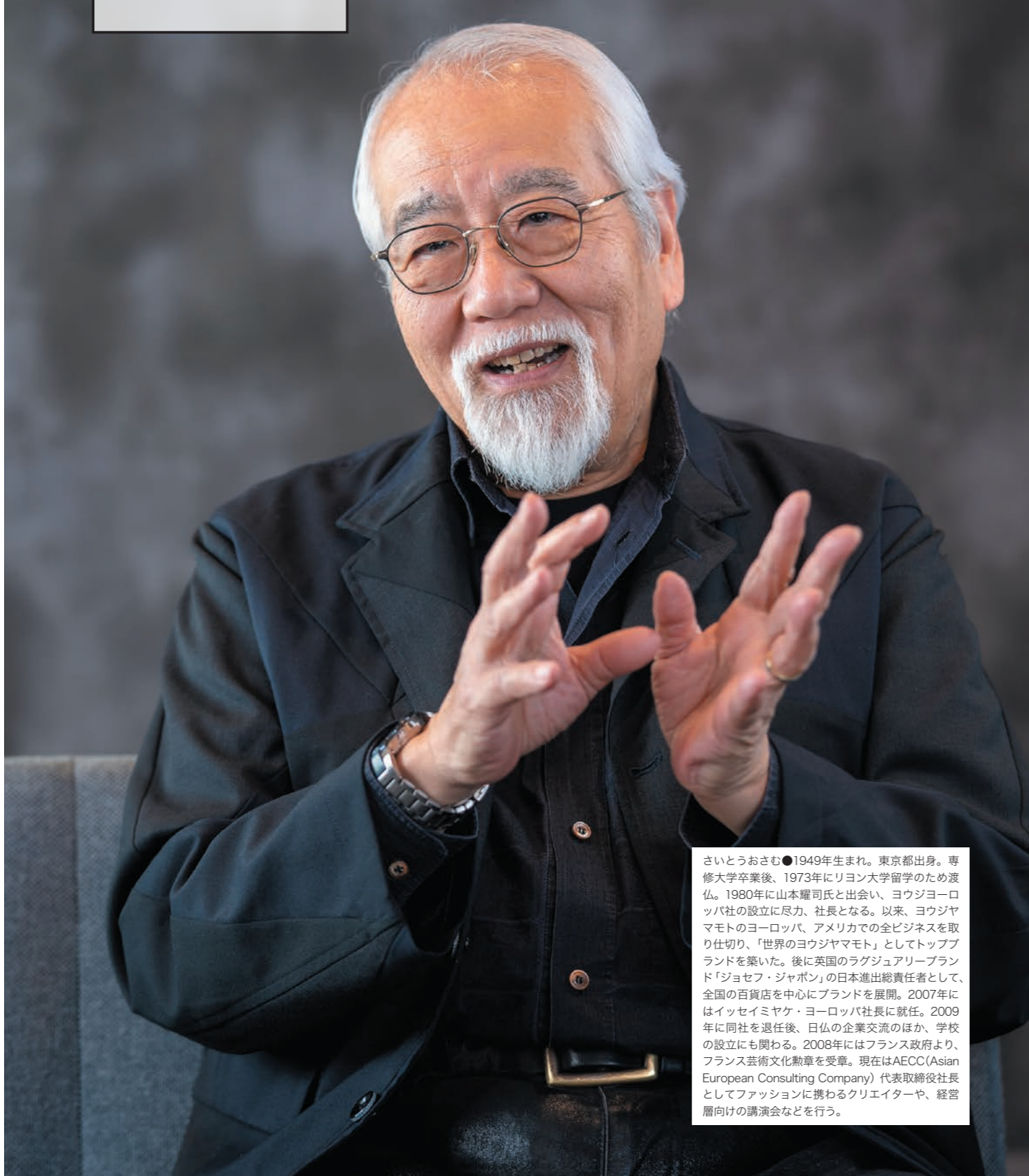


AECC代表取締役社長

齋藤 統さん

(昭49・人文)



さいとうおさむ●1949年生まれ。東京都出身。専修大学卒業後、1973年にリヨン大学留学のため渡仏。1980年に山本耀司氏と出会い、ヨウジヨーロッパ社の設立に尽力、社長となる。以来、ヨウジヤマモトのヨーロッパ、アメリカでの全ビジネスを取り仕切り、「世界のヨウジヤマモト」としてトップブランドを築いた。後に英国のラグジュアリーブランド「ジョセフ・ジャボン」の日本進出総責任者として、全国の百貨店を中心にブランドを展開。2007年にはイッセイミヤケ・ヨーロッパ社長に就任。2009年に同社を退任後、日仏の企業交流のほか、学校の設立にも関わる。2008年にはフランス政府より、フランス芸術文化勲章を受章。現在はAECC(Asian European Consulting Company) 代表取締役社長としてファッションに携わるクリエイターや、経営層向けの講演会などを行う。

1970年代から80年代にかけ、日本からきら星の如くあまたのクリエイターが誕生し、世界へと羽ばたいた。ファッション分野では、三宅一生氏（イッセイミヤケ）や川久保玲氏（コムデギャルソン）、山本耀司氏（ヨウジヤマモト）が御三家と呼ばれ、世界に衝撃を与える。その中の1人である山本耀司氏がパリに設立したヨウジヨーロッパ社の社長を務めたのが、齋藤統さんだ。

それまでファッションとは無縁だっ

たという同氏だが、のちにヨウジヤマモトUK、ヨウジヤマモトUSA、ヨウジヤマモト ジャポンの社長を兼任し、文字通り世界を相手にビジネスを展開してきた。ヨウジヤマモトを世界が認めるトップブランドにまで成長させた手腕と経営哲学は、今でも多くのファッションデザイナーやビジネスパーソンに学びを与えている。しかし、大学では文学部に籍を置き、経営どころか社会人としての目標も見出していなかったという。就職活動

もせずに、度々、フランスへと足を運んでいた当時を振り返って微笑む。

「私の父は東京工業大学で教授をしており、多くの学生を見ていました。そんな父に、私は高校生の頃から『お前は日本に合わない性格だから、外国に行ったほうがいい』と言われていたのです。なぜかという、言いたいことを言っちゃうからダメだと。たしかに、ずっと後になって日本の商社社長と食事をしたとき、『齋藤さんはずっと言いたい放題できたで

自らが信じた道を突き進み、ファッションビジネスで世界を渡る

大学を卒業し、フランスへ留学した齋藤統さん。

1980年にデザイナーの山本耀司氏と出会って以来、

数々のトップブランドで海外法人の社長を務め、ビジネスにおいて手腕を振るった。

今なおフランスを拠点に、世界の第一線で活躍する姿に迫る。

しょう。僕はずっと我慢して今の地位になった』と言われました（笑）」

就職はまったく考えず、一心にフランスを目指す

外国へ行くならまずは語学を学ぶ必要がある。1970年代はアメリカがカルチャーの中心であり、外国といえばアメリカだった。ただ、自身を「ヘソが横についている」と語る齋藤さんは、アメリカ以外で英語ではない言語を学ぶ選択をしたのだ。

「語学教材で、スペイン語、ドイツ語、イタリア語、フランス語を一通り聞いてみました。すると、フランス語がもっとも耳に馴染むと感じたのです。専修大学に入学後、教養課程でフランス語を専攻し、勉強を続けました」

そうして言語に触れるうち、フランス

という国の魅力に惹かれ、大学卒業後のフランス留学を目指すようになる。3年生までの間でほとんどの単位を取得して時間をつくり、日本とフランスを行き来しながら、留学準備を進めていた。

同級生が就職へと舵を切る時期にも、留学の決意は変わらず、一切の就職活動をしなかったそうだ。心配した大学就職課の職員が何度も手紙や電話で連絡を取ってきたものの、当の本人はどこ吹く風だったと笑う。

「私があまりにも無視をしていたからか、このまま就職できなくても面倒を見切れないという最後通牒をいただきました（笑）。今となっては大変申し訳なかった、きちんと報告しておくべきだったと思いますが、懐かしい思い出です」

同級生からも心配されていたが、父の了解も取りつけ、リヨン大学へ語学留学

の手続きを着々と進めていた。そして卒業も間近になった頃、齋藤さんが所属していた心理学ゼミの故・重松毅教授から手紙が届く。「卒業論文が残っている」と知らせる内容で、齋藤さんは慌てて帰国して論文を仕上げた。そうして無事に卒業が決定し、晴れてパリへと旅立つことになる。

「重松先生からは、フランスに行っても何度か『大丈夫か?』と手紙をいただきました。当時はメールなんてありませんから、なかなかお返事も出せず、申し訳なかったです。ただ、先生のお気遣いに大変感謝しています」

リヨン大学への留学を選んだ理由は、知り合いのファミリーがリヨン郊外に住んでおり、心強かったからだ。まずは同大学の外国人講座へ語学留学生として入学し、現地でフランス語の学びを深めた。



1973年、パリへ出発の日(写真左下)。左から2番目が齋藤さん、右端はゼミ仲間の井上顕示さん(昭49・人文)。1974年、夏期仏語研修中にブザンソン大学の寮にて(写真上)。1977年に街の教会でフランス人女性と結婚(写真右下)。

「フランス語には名詞における男性形と女性形の変化や、それにともなう形容詞の変化など日本語にはない要素がたくさんあり、日本で学んだ以上に複雑でした。それを必死に覚えて語学講座を修め、経済学部を受験しました」

学部は語学講座以上に、フランス語の能力が必要となる。当時のリオン大学では、講師と受験生が1対1の面談方式で、語学力を測る試験が行われた。

「受験生が順番に呼ばれて教室に入り、5分程度で出てきます。自分の番が近づくと緊張は高まっていき、ついに私が呼ばれました。面接官から『日本の経済についてどう思うか』と聞かれ、無我夢中で20分ぐらい話していたと思います。もちろんフランス語です。すると、その場で『君は合格だ』と言われ、経済学部への入学が叶いました」

やっとの思いで学部入学を果たし、フランスで経済学を極めるため勉学に励んだ。しかし、ほどなくして齋藤さんの身に大事件が起こる。

「当時、インターンをしていた会社で社長交代が起こり、給与が止まってしまいました。生活費に充てていた収入がなく

なり、日本に帰るしかない状況となったのです。ただ、私には結婚を約束したフランス人の恋人がおり、どうしても日本に帰りたくない。そこで父に頼み込んで最低限の生活費を出してもらうことにしました。同時期に恋人と入籍し、フランスを拠点に人生を歩む覚悟を決めたのです」

金銭的な事情から大学は休学し、日本企業のパリ支社で働くこととなった。ところが父の想定通り、齋藤さんは日本企業の体質に馴染むことができず、退職して起業の道を選ぶ。

「大学はそのまま中退し、フランスの経済情報を日本へ発信する事業を始めました。当時の通商産業省(現・経済産業省)の外郭団体などから依頼を受け、日本とフランスの経済をつなげるような仕事です」

具体的には日本の電化製品を世界展開するにあたって、フランスやヨーロッパ各国の規格を調査して報告するといった事業内容だった。今でこそ、このような調査情報の重要性は認知されているが、当時はその価値が高く見られておらず、安い対価で満足な収入を得られなかったという。そんな状況を知った父からは「日

本に帰ってこい」と言われ、自身のキャリアについて悩んでいた。

自身の人生を変えた、大きな才能との出会い

1979年、一時帰国も視野に入れていた齋藤さんのもとへ、日本大使館に勤める友人から連絡がくる。これがまさに、運命的な出会いへとつながるのだ。

「ファッションデザイナーの山本耀司という人を知っているか、という電話でした。当時の私にファッションの知識はなく、知らないと答えると、『フランス語が堪能で、経営もできる人を山本さんが探しているから、日本に帰るなら一度会ってもらえないか?』とのこと。実はそれが、ファッション業界で働きかけとなります」

依頼内容は、『エル・ジャポン』*の創刊お披露目パーティーにフランスから来日する関係者との、通訳をやってもらいたいというものだった。齋藤さんはすぐにOKしたという。

「日本に戻って、会社で初めて会った耀司さんは、スリーピースにネクタイ姿の私を見て『ちょっとまずいな、その格好』と(笑)。するとY's for Menのオフィスで、耀司さんがスーツとシャツを選んでくれたのです。そのまま、今まで着たことのないデフォルメされたダボダボのスーツで、パーティー会場に行きました」

通訳としての仕事を終えて、スーツを返すためアトリエに行くと、ずっと押し返されたという。

「耀司さんは『入社プレゼント』とだけ一言。今でもかっこいいなと思いますが、当時の私は30歳ぐらいの若造ですから、そんなことされたら惚れ込みますよ。そこには今まで自分が生きてきた世界とは、まったく別の価値観がありました。それでヨウジヤマモトへの入社が決まったのです」

フランスに戻った齋藤さんはヨウジヨーロッパ社の設立に尽力し、社長に就任。当時、日本人デザイナーの先駆者としてフランス在住の高田賢三氏が現地でケンゾーを立ち上げ、三宅一生氏のイッセイミヤケが頭角を現し始めた頃だった。



フランス文化省から芸術文化勲章授与の知らせ(写真左)。受章式(写真右)では父の親しい友人であるピエール・ラフィット上院議員(当時)と。

ただ、世界における日本人ブランドの地位は、まだそこまで高まっていない。そんな時代に山本耀司氏のヨウジヤマモト、川久保玲氏のコムデギャルソンが、パリの店舗で秋冬コレクションのショーを開催することを決める。1981年4月のことだった。

「ショーがまずまず成功し、次は同年11月に春夏コレクションのショーを大きな会場でやったら、ヨウジヤマモトの常識を打ち破るデザインは、火がついたように話題を呼んだのです」

ヨウジヤマモトやコムデギャルソンの洋服は、それまでタブーとされていた3つの要素を盛り込んだデザインだった。1つ目はアンシンメトリック。フランスで評価されていた左右対称のデザインとはまったく異なり、スカートもジャケットもずれていて、ボタンを掛け違えたように見えるもの。2つ目はデフォルメで、例えばジャケットにおける肩の位置を実際の肩とずらすようなデザイン。そして3つ目は黒を使うこと。当時のヨーロッパで、黒といえばフォーマルなドレスか喪服に限られていた。それを日常的に着る洋服に使ってしまうことは、強烈なインパクトを与えたという。

これらは話題を呼ぶ一方で、現地では奇異なるもの、プアルックとされた。ファッション評論家やメディアは、こぞって山本氏、川久保氏を叩いたのだ。

「あるとき、現地の評論家が街で私を呼び止めました。そして指を突きつけながら『お前、ヨウジヤマモトの社長だろ。ヨウジに言っておけ、日本人は洋服なん

かつくらないで着物を着てる!』と罵声を浴びせてきたのです。ファッションにおいては後進国と見ていた日本人が、ルールを覆すデザインを提案するなんて、フランス人にとっては文化を冒瀆されたような衝撃だったのでしょう」

しかし山本氏は周りの評価で意気消沈するようなタイプではなく、むしろやる気になって「齋藤くん、がんばろうな」と意欲的に海外進出へと取り組むようになった。そこから潮目が一気に変わったのは1984年、ジャングルをテーマにコレクションを発表した直後だ。

「耀司さんが『ちょっとインドネシアに行ってくる』と言って、パリで別れたことを覚えています。彼は現地でインスピレーションを得て、ジャングルプリントの洋服を発表したのです。それが大成功で評価が一変し、『世界のヨウジヤマモト』と呼ばれるようになりました」

劣勢から評価が変わっていく様、それを山本氏とともに駆け抜けてきた経験は、齋藤さんのキャリアにおいて非常に大きな意味を持つ経験となっただろう。

モードの未来に向けて、今なお挑戦を続ける

齋藤さんはヨウジヨーロッパ社の設立時、サンプルとカタログを持ってショッブを駆け回った。その際、ミラノ、ローマ、ロンドンなど、各国の商習慣に学び、営業戦略も身に着けたという。

「ブランドが成長し、UK、USA、ジャポンと社長を歴任しました。ヨウジヤマモトは世界のトップブランドとなり、次

第に私自身がやることも少なくなってきたのです。そんなとき、父が『これまでの経験を活かし、次のステップに進むのも人生だよ』とアドバイスくれたのです。そこで45歳のとき、思い切って退職する決意をして、耀司さんと話し合いました。『せっかくまいた種が実を結ぼうとしているのに、食べないで行ってしまうのか』と引き留めてくださいましたが、それは皆さんで分けてくださればいいと、自ら挑戦する道を選んだのです」

その後、齋藤さんは数々のトップブランドで社長を務め、フランスの広報・PR職人材を養成する学校の日本校設立にも尽力した。その功績が認められ、2008年にはフランス政府から芸術文化勲章を授与されている。そして75歳となった現在もフランスを拠点に活躍し、年に数回、日本に帰国して若手育成のために講演などを行う。

「日本を外から見ると、とても大切だと思います。私にとって、フランスに行くことは将来を左右する、思い切った決断でした。結果的にフランス語を習得して現地でビジネスを展開でき、妻とも知り合えたことは、私にとって大きな幸せです。だからこそ、その経験や得た知見を、これから羽ばたいていく若い世代にもっと伝えていきたいと考えています」

振り返れば、人生の転機は常に突然訪れていたと齋藤さんは笑う。今なおフランスと日本を行き来しながら、後進のためにと精力的に活動する同氏の目は、未来を見据えて強く光っていた。

(2023年11月24日取材)